

新型インフルエンザ等改正法案の審議が始まりました。

当初は飲食店やむしろ保護されるべき感染者に刑事罰が科せられるというところでしたが、どうやらそれは修正されたようです。しかし行政罰として「50万円以下の過料が科せられる」ということです。飲食店の経営者はとても心苦しいのではないかと心配します。罰則の規定があるからには補償の規定もしっかりと整えるべきですが、さてこの改正法が実際にどのように適用されるのか。その第一条の目的は、

新型インフルエンザ等の発生時において国民の生命及び健康を保護し、並びに国民生活及び国民経済に及ぼす影響が最小となるようにすることを目的とする。

つまりこの法案によって守るべきものは「国民の生命及び健康」並びに「国民生活および国民経済」であり、(国民だけでなく居住している外国籍のひとたちも含めるべきだと思いますが)二飲食店や一個人の権利よりも公益を優先させるということとなります。このように公共の福祉を優先させる法と個人の権利の問題は、宗教、福音書の時代において事情はどうでしょうか。宗教一般にいえることは、宗教が祭儀や祈りによって聖と俗の間を橋渡しする役目をもっているというところです。そしてユダヤ教の場合は、その最たるものが安息日だということになります。

出 20:8 安息日を心に留め(覚えて)、これを聖別せよ。

安息日については、まず「覚えよ」という戒めがあり、次に「聖別せよ」という戒めがあります。この日は聖なる時間であるので、俗なる日常に行っていることが禁じられます。

それと引き換えに日常しないことを、行います。ひろく宗教一般に、聖と俗の境を超える際には、厳格な儀式がなされます。参考までに、現在のユダヤ教でも、金曜日の午後から、掃除をし、身を清め、安息日のための食事を準備する、そして日没になると祝福の祈りを唱えるのです。安息日になると火を使わない食事が供されて(家事労働からも解放される)、家族の団らん、シナゴークでの礼拝、すべて生きて喜びを増すためのいなみがなされるのです。(ユダヤ人とユダヤ教 市川裕著)

この安息日について、イエスはどう理解していたのでしょうか。マタイ福音書の12章によれば、ある安息日に弟子たちが空腹になったので、麦の穂を摘んで食べます(12・1)。その様子を目撃した律法学者たちはとがめます。『御覧なさい。あなたの弟子たちは、安息日にはならないことをしている』と。これに対して、イエスは反論します。『ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか』と。

イエスがお答えになった根拠は、サムエル記(上21章)にあるダビデの故事でした。サウル王から逃げるダビデは、緊急の事態だからと祭司アヒメレクに懇願して献げ物のパンを五つ貰い受けるです。規定(レビ記24章5〜9節)によれば、このパンは祭司たちだけが聖なるところで食べなければならぬものです。このようになことを引き合いに出して、イエスは安息日の法といえども例外があるのだというのです。

しかしイエスは、

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである(17)」

これは厳格に規則を守る立場からみれば、明らかに矛盾ではないかと言いたくなります。はたしてイエスは、どんな規則についても、必ず例外もあり得るといって考えに立ち柔軟に運用することによって律法や預言者を完成するのだ、と唱えておられるのでしょうか。鍵となるのは次の言葉です。

18はつきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えつせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。

「律法の文字から一点一画も消え去ることはない」とは、一言で言い換えると「神は、決してないがしろにされることはない」ということを暗に示すのです。神の名ヤハウェは YHWH や יהוה、I 点どころのは最初の Y (ヨッド) であり、一画と云うのは W (ワウ) のことです。またラビの解釈では小さな点ヨッドは、人間を表すのです。そして一画は神の祝福が降りてくることを意味します。つまり小さな存在をおと神は自らをあきらかにされる、そしてその存在を通して祝福をもたらすということになります。

だからタビデ自らが王サウルに追われ、命の危機にさらされているとき、タビデは小さな存在であり、そこにあるタビデの命をつなぐものが、聖別されたパンであることも、彼はそのパンを受け取るのです。イエスと弟子たちが安息日に空腹に耐えかねて麦の穂を摘んで口に入れようと、小さな存在である彼らは、ゆるされるのです。つまりイエスは法を現実適用する際の解釈について言っておられるのです。そして安息日の規定のよつに大きな掟では小さな存在に目をとめるよつにおつしやるのです。しかし、小さな掟については…

19だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そつするよつにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そつするよつに教える者は、天の国で大きいなる者と呼ばれる。20言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさつていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

小さな掟といつのは具体的にどついう掟なのでしょうか？

申命記22・6 もしあなたが道で、木の上、または地面に鳥の巢のあるのを見つげ、その中に雛または卵があつて、母鳥がその雛または卵を抱いているならば、母鳥を雛と一緒に取つてはならない。

その他にもあります。

レビ19・9 穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。10 ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。

しかしそれは教会（宗教）の倫理観であり、教会から一歩外に出れば一般社会（非宗教）の法に従わなければならぬ。わたしたちには、多少なりとも虚しさを感じずにはおれません。わたしたちの現実社会でそのような弱者を保護する倫理的な例外規定がなされると、おそらく反対意見が起るでしょう。貧しくて生きるために万引きをしてしまつたひとがいる、そついう小さな事件について、心情はわかるけれど、許されないと言つたらう。しかしながら、もうしも小さな悪を許さない基準をすべてに適用するならば、大きな力による不正を断罪をもしなければならぬはずだ。

そのような法律をたつていくとある問題にぶつかります。ハインリヒ・ハイネは法律を学んだ学生時代を振り返りローマ法の根源的な問題を論じています。略奪し支配に治めた国々に略奪品の所有を保障するのが法律の制定だったのです。

弱いものには強く、強いものには弱いわたしたちが、神の意志になつたために、勇猛果敢に巨悪を裁きなさいとはイエスは言われぬのです。小さな点のような存在に神の祝福が注がれる、そこにあなたは共にいることだけがイエスがわたしたちに求めておられることなのです。